

眞 生

第 八 卷 第 四 號

- 花咲き鳥笑ふ四月八日、今日は釋尊降誕の佳節に當る。佛教の信徒はもとより殆ど我が國の國民は擧つて此の日の誕生を祝ふ如くである。
- 乍然本當の意味に於て、幾人が果して釋尊の降誕を祝ひ得るものぞ。それはたゞ一日を喜んで一日の生命を空費することではない。
- 私の一家でも、今日は殊更に誕生佛を飾つて、赤飯までも供えてある。之は私の妻が此の日を祝ふ心盡しの表現であらう。
- 乍然それはたゞ單なる釋尊一人の誕生を祝ふのみのものであつていけない。それはまた、正しく私共の佛心發生の自我の誕生をも記念するものである。
- 釋尊の誕生が天地を指して天上下唯我獨尊と示されたのは、之は一体何を示したものであらうか。若しも之が釋尊唯一人の獨尊を示すものならば世に之はご傲慢にして無禮なることではない。
- 乍然釋尊の唯我獨尊は單なる釋尊一人の獨尊ではなかつた。而てそれはあらゆる我以外のものに對して、我そのものの獨尊を示したものであつた。
- 而も此の自覺の誕生が私共の上につたとき、釋尊と私共が本當に此の世に共に生れたので、之を祝ふのが佛徒の即ち降誕會であつた。
- 然に現今、人々は未だ唯我の尊さを知らない。従つて、未だ我よりも肉身を尊び、財物を敬い、名譽を重んじて、いつも眞我がそのの奴僕である。
- 乍然、之では佛教を知らないのだ。従て釋尊の降誕會も未だ眞の意味をなさぬのである。(念)

焰の体験

目次

焰の体験	尅子
生存の意義	土屋親道
禪勝房	中村神羽
九州に歸りて	土屋親道
念佛と生活	大橋登志高
汽車の旅	神谷善之進
吾朋便り	

念佛するご何の爲めになりますか。

何の爲めにもなりません、お念佛はご何の爲めにもならぬものはありません。信仰をするご何の役に立ちますか。

信仰はご何の役に立たぬものはありません、腹をふくらかすのなら十錢の大福餅の方が早途です、肩の凝りを治すのなら按摩さんへ走つた方が早道です。お念佛は十錢の大福にも及びません、信仰は肩の凝り一つも治せぬのが本當です。

現代は何でも早く利き目のあるものでなくては流行りません。だから信仰も、何に利く彼に利くご利き目付きで賣出す、効能書きの信仰でなくては買ひません、やがて信仰には効能が付き物だとなつて了つて居ります、けれど景品付の信仰は危険です、たとへ景品が附いてゐても、景品に目ぼくれて買つてはいけません。信仰そのものを買はればなりません、信仰そのものからは景品以上の徳を得ます。

信仰は何の役にも立ちません。

何の役に立つ、彼の役に立つご数へる以上に大きな役に立つてゐます。餘り大き過ぎて其全体が眼につかぬのです、眼に附くのは其二三で、何に利いた、彼に利いたご騒いでゐるが、そんな小さなものではなかつたのです。だから信仰を小さな丸薬のように限定してはいけません。無功德の功德に徹せねばなりません。

(尅)

□ 佛様でも怒られる時があります。

□ 佛様の怒られた時の御顔が見たりや不動様を見るが、あれが怒られた時のお顔です。私は自分が生意氣に出来てゐるから、ほめたり持上げたりして下さる人より、此の生意氣を肉皮に擲したり、罵倒して呉れたりする人の方が好きです。それで阿彌陀様のお顔を見てゐるご、どうも餘り許し過ぎて下さるような氣がしていません。却つて感の一つであります。

□ あの焰の中に立つてゐても焰に焼けて居られぬ不動様、あれは焰が不動様であり、不動様が焰になつて居られるからだらうと思ひます。私達もそう云へば焰の中に立つてゐるごが多い、家中の者を何さかして食はして行かんならぬご、而かも其焰の爲めに身を焼かれてゐます。それにあの不動様は焼けぬばかりか、自ら焰となつて他を焼いてゐられる、他を悉く焼けぬ不動ごたいと燃えてゐられる、此点からもあの不動様を慕しく感じます。

□ あの焰は不動様の焰であるご共に如来様の光明であります。如来様の光明が其儘焰となつてゐる姿で、慈悲の心が怒りとなつて現れたごとき、それが智慧の焰であります。怒りとなつて顯はれてゐる慈悲を、もつご多く私達は享け容れればいけません、それと共に此の焰となつて現はれる愛を、もつご多く私達は享け進むごといふごときは、おごなしくなつて人の御機嫌を取ることが上手になるごではなく、人の意に逆つても、自分に他ごと共に向上して行く真剣さでありたいと思ひます。

□ 信仰でよく怒つた人はイエスです、又日蓮上人です。一面あれ程よく泣いた人情の厚い人もないが、あれ程よく怒り廻り暴れ廻つた人もありません。法然上人や親鸞聖人にも同じような點を見出すが、寧ろ、此等の御二人は内面的に許されなかつた真剣さを尊く見出します。

今や政治、經濟、科學、藝術、宗教など、いづれの方面に對しても冷靜なる批判抉剔、創造が要求されてゐます。阿彌陀様のお慈悲が總てを認容してゆかれるご共に、不動様の智が總てを剖判して改造してゆかれる、此一面をも深く體驗して行きたいと思ひます。(尅子)



生存の意義

土屋 觀 道

一、意義ある生活

○一口に生存の意義と云つても何が生存の意義であるかは言い易くして、甚だ得がたいことである。乍然意義ある生活をするのが生存の意義であることは言ふまでもない。言換れば生きがいのある生活をすることが即ち生存の意義である。

○乍然かう申すと、それはたゞ單なる言葉の巡環であつて生存の意義とは意義ある生活をするこゝとあり、意義ある生活とは生きがいある生活のことであり、其の生きがいある生活が即ち生存の意義と云ふことになる。

○そこで、私共はこゝにかうした言葉の巡環を止めて、更に一步を生存の意義そのものゝ内容にまで進めねばならぬ。此の意味に於て、私共生存の目的はどこにあらうか、此の目的を完うすることが即ち人生の意義であり、又それが生存の意義であらねばならぬ。

○乍然生存の意義が生存の目的を完うするにあると云ふことも、之また言葉の巡環になり易い、而て其の生存の目的が何であるかは恐らくは單なる理窟では到達し難い事柄である。

○何となれば人生の目的と云つても、それが人生の目的であるのか、而も其の目的が何であるかは可

なりに判然とすることができないからである。

○茲に於て、私は之を率直に人生の意義は自己の本心を満足させるにあると云いたい。そして、其の對して、全身の満足を感じる活動に外ならぬ。

○然ばそれは何であるか、私はそれも亦率直に云ふ、即ち自己の永生と無限の向上とである。永生とは不滅の自覺である、向上とは人格の完成、價値の生活である。永生と

の從つて、いかなるが不滅の自覺であり、いかなるが人格の完成、價値の生活であると云へば、そこには私共の限りなき自己の生活の反省を要する。乍然それらは今暫く別として、こゝにはたゞ、永生と向上との要求と云つて置く。

○やさしく云へば死にたくない、よくなりたい本心の要求である。即ち私共の生存の意義は此の二を外にして何もものもないと云ふのが私の宗教である。

二、永生と向上

○然ば私共の死にたくない、よくなりたいとは一体何を意味するのであらう。單に死にたくないと思ふだけなら、あらゆる動物にも其の生命を愛する點に於て、あえて私共と違つたところもない、そしてありとあらゆるものは常に自分の生命を愛護して、死を免れる爲めならばあらゆる努力も、之とむ。生存を維持する爲めならばいかなる苦しみも事ともしないものがある。

○然乍ら彼等の生活にも或る場合には其の尊い生命も顧みず、自ら生命を屠して闘ふものゝあるのは一体それは何故であらうか。殊に自己の子供の爲めとか、自分の同族保護の爲めとか、時としては自己を忘れて、其の爲めに自らの生命を顧みぬこともあえて少くない。

○ところで、かうした要求は必ずしも動物の間にはかり起る事柄でなく、ともすれば今日多くの人間社會の間にも度々見られる事柄である。して見れば凡そかうした社會生活は一般生物界に於ける根本共通の生活と云つてもよいのである。

○そして、その中に自己を保存すると種族を保存するとの二つがある。前者は主として、自分の永生と向上とを計り、自分の身心の發展向上を要求して止まない。

○後者は更に分つて二とする、一は性的關係と二は親子の情愛である。二者共に愛の問題であるが前者は戀愛の問題となり、後者は親子の愛、子孫繁榮の中心を爲す。

○第二には所謂經濟的生活である。死にたくない、能くならないと云ふ要求は延いて又社會の經濟的問題にまで及んでゐる。生物には自ら生き行くに相當の食がある。而て之を充たすものが所謂經濟問題である。

○而も現代は之を中心として働く時代はない。殆ど人生のすべてが經濟そのものに没投した有様である。それは必ずしも食えないからと云ふのではない。衣食に困らぬ人にして、反つてそれがはげしい有様である。

○乍然それが人生のすべてではない。従つて別にあるものは即ち第三の精神的な生活である。或は靈的生活と云つてもよい。從來のやうな肉身と經濟との爲めに自己を忘れた生活でなく、全く自己の本心の爲めに此の身と財とを使ふのである。

三、眞生の要求

○以上の生活の内、私共の生活は一体どれをとるべきであらうか。若しも理想を云ふならば前の三を永久に持つべきよいものはない。乍然その中に於て、何れを生活の中心とすべきか問題である。従

つて、單に此の三つと云ふならば誰として此の三を應分に持たぬ人としてはない。

○して見れば之は程度の問題である。従つて、こゝに私共の專注すべき問題は主として、之等生活の中、果して何れに其の生活の中心を置くべきかであらねばならぬ。従つて、人類生存の意義と云ふ問題は主としてそこにある。世に生活の反省を云ふも要するに之が中心を見出さんが爲めである。

○それについて、私共の生活に自分の生存を肯定し、自分の永生を要求して、向上し發展しやうと考へても、一体私共がそれをいつまで保持し得るであらうか、人間の生命には限りがある。夫婦、親子の生活にも亦自らの限りがある。

○然に私共の望みには限りがない、此の限りなき望みを以つて、此の限りある人事に接する、そこには人生の矛盾がある。死の前にはいかなる財産も意義をなさない。而も此の死は永久に私たちをおびやかすではないか。

○肉体の死を知つて、初めて永生の光を見るも、未だ此の死を知らずしては恐く永生の光を見る人はいかと思ふ。父母兄弟、親子、親籍の死ばかりではない。やがては自分そのものが死ぬのだとの反省である。

○年は五十も六十になり乍ら、自分の死さへも知らぬものがある。そして、本當に生くべき自分を知らずに、たゞ朝夕となく金錢の奴隷たる人がある。金錢の爲めの自分が本當か、自分の爲めの金錢が本當か。

○世に肉慾の奴隷と金錢の奴隷と又徒なる名譽の奴隷がある。乍然それが果して、眞實の人生であらうか。眞實の自己を見よ、永生の自己を見よ。人はそこにのみ初めて眞生の自己を見る。

○肉慾の奴隷となるのが人生でないとは少しく考へれば誰でもが知り得ることである。乍然人生の爲めの肉慾であると眞に知り得る人が幾人であらうか。財慾の爲めの人生でないこと云ふことも亦判り易

い事である。乍然人生の爲めの財慾と云ふことを眞に知る人は更に少い。
○誰か此の世に於て自分を愛しない人があらうか。乍然どうすることが眞に自分を愛すことかを知る人はない。従つて、世間多くの人々は深く自分を愛するにかゝらず、反つて眞に自分を愛するの道
を知らない。

○乍然肉慾と云ふことが必ずしも悪いのではない。その爲めにより以上の爲すべきことを怠るときそ
れが即ち惡となる。財慾も亦同じである。従つて、肉慾も財慾も自分の活動を助くるの源泉となり、
社會の發達を助長するの力となるならばそれは決して悪いものではない。

四、價値の生活

○私共は色々の理窟を抜きにして、一つの眞理を愛する。而もそれは人間の生活によいとか悪いとか
の考へもない。たゞそれが一体どうなつてゐるのであるかを知りたがる心がある。

○乍然その間自ら私共は人間の生活に都合のよいのをとり、之に悪いのを遠ざからうとする傾きをも
つ、今日の學術に於て、純粹科學は前者に屬し、應用科學は後者に屬する。

○次に私達は感情の上に美を愛する傾きがある。そこには天然の美もあれば、工藝の美もある。何故
か醜汚のものを嫌ふて美麗のものを愛する心がある。更に詳しく言ふならばそこには人情の美もあれ
ば莊嚴の美もある。

○而もそれが人と人との生活、自分と社會との生活關係にはいかにあるべきかと云ふ道德の生活があ
る。善を好んで惡を嫌ふの心が即ちそれである。

○乍然此の三つは決して各別に獨立したものである。従つて三者は常に相關して始めて其の一を完
ふすることも出来るのである。而てその究極は結局其の人の全人格の満足である。

○眞と云い善と云い美と云ふも、其の極は人格的統一に於て、始めて其の効を完ふするものである。
之を聖なる世界と云ふ。即ち智情意の統一の究竟地である。涅槃と云いひ、極樂といひ、淨土と云
い、天國と云ふも要するに皆此の境地の謂に外ならぬ。

○従つて、眞實の淨土は一方宇宙の眞理であると共に、又それは美の世界であり、善の世界である。
従つてそれはまた、科學的にも、藝術的にも、道德的にも一切が許さるべき世界である。

○而もさうした世界は一体どこにあるであらうか。それは少くとも私共の智情意の満足する眞善美の
世界に於て之を求むより外はない。更に言いかへれば私共の生活はかうした意味に於て、常に眞善美
に進むべく生れつけられてゐるのであるとも云へる。

○何となれば私共は生れ乍らにして、智情意の三面を有し、併せて常に之を統一せねばやまない人格
の所有者であるからである。言換れば私共は已に生れ乍らにして、宇宙の眞と善と美との世界に融す
ることのできるやうに生れつけられたとも云へる。

○何となればそれは私共の本心が宇宙の本心から分れたものであり、宇宙の眞理と一致せねば止まな
いやうに生れついて居るからである。

○従つて、私共が自然に生長し、生れつきのまゝに發展して行くときは、いつしか如來と等しき宇宙生
命の發芽として、自ら眞善美の生活に自らを置かねば止まぬ佛性の活動となつて來るとも云へる。

○何となれば宇宙の本源と私共の本心が決して別でないからである。従つて私共は宇宙の本源から
生れたもの、宇宙の本源を宇宙の大靈とするなれば私共は即ちその大靈の御子と云はれる。

○釋尊が自ら宇宙の大生命として一切の衆生を我が子なりと云はれたのも、その点に於て決して間違
いではないのである。従つて私共が佛性を持つてゐると云ふことも即ち此の意味から考へて決して信
せられないことではない。

五、生存の意義

○従つて、私共生存の眞意義は少くとも此の世に生のある限り、自分の生存の眞意義を自覺して、之を此の世に實現すべきにありと云はねばならぬ。即ち言換れば少くとも私共の心に與えられたる本心の輝くまゝに自己の全分を盡して、宇宙の眞理を此の世に極め、あらゆる善美を盡して社會の改善、人類の發達に此の身心を盡すことである。(昭和四、四、三—五)

禪 勝 房 (下ノ三)

中 村 神 羽

又た或る時かう云ふ事もあつた。

上総國周東郡に住む在阿彌陀佛と云ふ人は、是れ亦た天台出の人であつたが、吐血の病にかゝつてから、すっかり名利を捨て、専ら念佛の一行に志す様になつた。けれども然ら上人が御往生なすつてから數年たつた後であつたから、その人の説が御上人の眞説であるか分らなかつた。

諸行も本願だと云ふ人もあり。多念に勵むのは自力で邊地にしか生れないと云ふ人もあり、甚だしいのになると、彌陀の本願は罪惡の凡夫の爲めに建立したもので、

一念を報土往生の正因と定めたのであるから、我々凡夫は唯だ其本願の旨を信じ、其願力にすがつて居りさへすればよい。此故に一生懸命に御念佛するなどは、馬鹿の骨頂でありまた罪を恐れる事など、御本願の趣きを本當に理解して居ない反証でもある。悪い事をするのは我等の分であり、其惡人を救つて下さるのが、佛智不可思議智の本領であるのだから、其佛智の一念を了しさへすればよいのである、と云ふ様な説もあつてさつぱり譯が分らなかつた。

在阿は自分が死にかゝつて居る爲めに、道を求むるに

頗る急であつた。身体の許るす範圍に於て、色々の人の處へ尋ねて行つた。而して遠方の處へは飛脚を立て、手紙で疑問を質だしたりした。

或る年禪勝房の處へも、在阿からの書狀が届いた。

「此の二三年の頃より御渡り候の由、承り及んで朝夕參ず可しと出で立つ心計りは暇もなく候なり。然れども病者たるに依つて參せしめず候。疎略に似たりと雖も同行の便宜を以て不審に存じ候事共書き進せしめ候者なり。」

建長七年九月廿五日

繪州 在阿彌陀佛在判

進上

遠江國一宮御領蓮華寺上人御房御禪室」

とあつて別紙にこまゝと疑問の事項が書かれてあつた。

禪勝房は一々丁寧に返答を認めた。而して其返書を使の者に渡し乍ら話すのであつた。

「淨土宗の學問の所詮は往生極樂は誰でも出来る、至極容易な事だと心得る迄が大事で、あとは何でもない事なのです。如來様の御慈悲が罪惡深重の私達を包んで、ぬくぬくと温めて下さる。其御本願に目醒める事は、天台學などやつた者にはこと更ら難かしい事です。ですから何とか彼とか六ヶ敷い理窟を付けて、自

分を満足させたいのではないかと存じます。近代の學匠達が色々の異説を立てるのも、自分がすつかり愚痴に販へつて御念佛する事が出来ないからではないせうか。無論御釋迦様の教法は意義甚深ですから深遠な哲學もろみ出されるでせうが、信仰實感を主とする私達の様な無智な一國者には大した用もない様です。故御上人様も決してそんなむづかしい事は仰しやらなかつたと思ひます。私がかつて御上人様の會下を辞する時、土産だと云つて下さつた御言葉があります。

聖道門の修行は智惠を極めて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生ると心得へよ。

と云ふ事です。特に修行はと仰しやつた處に重点があると思ひます。誠に何邊線返へして味つても混々として盡きないものがあるではありませんか。

實に我禪勝房は念佛信者の典型であつた。二十九才の時から五十七ヶ年一向稱名の外何物もなかつた、本當に文字通り愚痴に返へつて稱名に魂を打込んだ人である。

正嘉二年の九月、一寸とした事から病床の人となつたが、御稱名の聲はますゝ力強くなつたと云ふ。

からだは段々死に近づいて行くけれども意識は明了であり音聲にも力強い確信が輝いて居た。

奇瑞と云へば云ふ可き色々な事も起つた。

十月三日の初夜の頃から正しく見佛三昧に這入つた。而して四日の明け方靜かに起きて端座合掌し、「南無阿彌陀佛、く、く」と高聲念佛三邊してにつこり微笑み乍ら息を引取つた。

九州に歸りて

土屋 觀道

一、氏神の祭禮

○三月の十三日、郷里に歸るべく東京を立つた。父母と兄嫁の年回をかねて、郷里の兄弟にも會ひ、美智子看病の疲れも慰したく思つたからである。道友の神谷氏（善之進）も福岡に商用がある云ふので同道した。

○十四日は博多に長兄を訪ね、法事の打合せして、十五日は郷里へ急いだ。此の日は丁度氏神の祭禮に當るからであつた。私が此の祭禮に會ふのは二十年ぶりである。おさな心の昔がなつかしく、氏神の祭禮がしたわしくてならなかつた。

○「さうせ歸るなら、氏神の祭禮に會いたい」と云つて急ぐので、私の妻が「丸で子供見たやうですわね」と笑ふので、私も「全くさうだ」と笑つた位である。乍然

年正に八十五才。夫は實に壯嚴極りなき大往生の姿であつた。嚴肅極りなき大往生の有様であつた。噫々、尊い哉、其一生涯！（完）

さう云ふものか、近頃の私には此の子供心がなつかしい。何だか過ぎ去つた古き昔が、かうした祭禮の中にありさうな氣がしてならないからである。

○然に愈々歸つて見れば人出の多いこみや、露店の多いこは昔ながらの相であつた。然し私の心には何故か祭禮の氣分が仕なかつた。何だか昔のやうな祭禮の精神がなくなつて、多くの人々はたゞ買物ばかりに來てゐるやうだつた。

○之は全く豫期を裏切つた。何と云ふあさはかな考へだ。私は今も尚昔のまゝの古郷であると思つたのに、此の町はもう昔のまゝの町ではなかつた。多くの人々も大半死んで、半は私の知らない青年のみが多かつた。

○さうして集まるものゝ多くは祭禮の氣分で祭禮の爲め

に集まる人はなく、多くはたゞ金もうけの人に過ぎなかつた。さうしてたゞ昔のまゝに残るものは遠くの山々や小川の姿があるばかりであつた。そこには何等の人情や祭禮の氣分はなかつた。

○私にはそれが見たかつた。あまりに急いだ爲めかも知れない。乍然今日の人情が昔に比べて浮薄となり金錢本位、利益本位になつて、靜に氏神を祭つたり、心から之を敬ぶ氣分がなくなつてゐることも又事實である。

○之ではならぬと痛感思つた。こんなここでは村人の氣分が益々荒れるばかりである。そこには何等の人情味も無くなり、物質本位の我利のみがはびこる。之は大いに地方として、留意しなければならぬ事ではないか。

○少くとも私共の小さい頃には月の朔日と十五日とは朝も早くから起き出で、氏神の前を流れる小川に清水を汲み、必ず之を氏神にもさへけて、拜禮して歸つたものである。加之、月の初めと十五日には氏神と祖先の靈を祭るべく、いつも御華さへ新しく取り更へたものであつた。

○従つて其の爲めには必ず誰か地方の山に華折りに行くのが恒であつた。而もかうした毎年毎月の神佛への行事がいかに私共をして敬神の念を無意識の中にも増させたか判らない。

○況んや年に二回の氏神春秋の大祭はそれこそ私共にとつては無二の喜びであつた。而もそれは益と正月よりも楽しいものであつた。一家はもこより全村擧つて之を祭つた。各地近郷の人々までが此の祭禮をいかに喜んだ事だか知れない。而もその集りの中心には限らない氏神に對する尊敬の氣があつた。村人の小供と青年にはそれこそ、氏神でものり入つたと云ふほどの喜びと望みと力が充ち満つた。

○此の清い氏神の祭禮がいかに私共の心をなつかしく嬉しく感せしめたかは今かうして思い出すさへも楽しみである。従つて私がはるく、東京から此の地に歸つて此の祭禮に會はうとしたのも此の昔のやうな祭禮の氣分に觸れんが爲めに外ならなかつた。

○然に今はさうした氣分が全く地を拂つてないやうな心地がする。之は一体さうしたのか。町の爲めにも國の爲めに之はゆゝしい出來ごとである云はねばならぬ。之では町の宗教は死んだのだ。

○殊に私は我國の宗教の中、此の氏神の祭禮ほど陽氣にして壯嚴に私共の心をして、賑はしく、また楽しくも之を益するものはないとさへ感じたのに、之は村民の深く反省すべきことではないか。

○尤もかゝる祭日に各地の村人が買物をかねて集ること

は古代の習慣として結構である。乍然それが祭の神精までも無くすることはよいことでない。然に今やたゞ其の祭禮の露店の慣習が残されたのみで、更にそれよりも大なる民集合同の氏神祭禮の精神がなくなつたと云ふことはかへすくも残念なことである。(四、四、八)

二、亡友を訪ふ

○十九日亡友を日田に訪ねた。友は私の福工時代の學友である。彼と親しくなつたのは彼が東京に来てからで、それ以前はあまりそれほごでもなかつた。

○殊に一層彼と仲よくなつたのは私が宗教界に入つてからであり、彼が肺患を病んでからであつた。私が彼の爲めに信仰を説いたことはもとよりである。

○其の後彼は東京を去つて古郷に歸つた。いつ頃であつたか私は知らない。乍然私が學校を出てからほごなく、九州に歸つた頃には彼がもう郷里にゐたことは確かである。それは私がその時彼を郷里に見舞つたからである。

○然に私はその後不幸にして彼を訪ぬるの暇がなかつた。そして彼は其後三年にして不歸の客となつたと聞いた。それ以來、彼を訪ぬるのは今回が初めてである。

○乍然私の心には其の後と雖も決して彼を忘れたのではなかつた。従つていつか九州に降るなら、一つ亡友を訪

ねたいとは己に永らくの願ひであつた。私が今度此の地を訪ねたのも全くその爲だつた。

○然また、私は彼の母君と彼の二人姉君を思ふことも深かつた。従つて、此の日田行きが此の三方の消息を知りたいためもあつたことは事實であつた。友が死んでから一度の音信もない。乍然それだからと全く忘れたのではなかつた、音信する人以上に亦忘れられない所もあつた。

○然に隣人の語によれば母君は友が亡した翌春に此の世を去つたとのことであつた。残つた二人の姉君もそれから間もなく此の町を去つたが、中國あたりへ各々嫁つたとのことであつた。

○住處が知りたいので、彼の本家と云ふのを訪ねたが、それも昨年の冬頃に此の町をたゝんで福岡に行かれたと云ふ。

○然し二人の姉たちが結婚したと聞いたとき、それはよかつたと心から安心した。そして、「一生安態なれ」と私は祈つた。

○私は路を村人に尋ねて亡友の墓に詣でた。友の名は母君の名と並べて同じ石碑の上にあつた。安かに眠る親子の姿が目に見えるやうである。母を慕ふその子其の子を思ふ母の心が永へにこゝに眠つてゐるやうでさへあ

つた。

○私は二人の墓前に手づから折つた。一枝の華を献げた心から一卷のお經と數遍の念佛も回向した。暫くの間は一切を忘れてその墓前にたゞすんだ。謂知れぬ喜びと淋しささへ流れた。

○私も遠からずかくの如くして此の世を去るに違いない。そして私の一族も亦いつかは離散せぬとは限らない。五年か十年ならまだしも、百年千年萬年の後、誰が此の世に此のことなすと云い得るものがあらうか。それはむづかしいことからである。

○私は黙然として墓前に立つた。はるくかうして訪ぬる心、君のみは之を知る。而も私はそれで澤山だ。○それから私はあちこちと日田の盆地を見廻した。而も

念佛と生活

大橋登志高

私は聖法然の遊女教化を讀んでいつも嬉しく思つて居る、佛教では女子の求道を許して居り乍ら、然も求道に依つての結果は許して居ない、たとへ許して居ても殆んど不可能に近いものであつた。ところが聖法然出でて山

懐かしき友の古郷として。之は友がかつて私に誇つた盆地である。「君、一度来て見よ、日田は名水の地だ、山あり、川あり、高原ありだ。幾多の志士や文人も出た所だぞ」之が友の誇りであつた。

○成る程日田の盆地はよい、山と云い川と云い、丸で畫にでもなりさうだ。友の昔この地に遊んだかと思へば町も一層に懐かし。

○乍然もう訪ぬるに人もなく、語るに友もないこの日田は、私には何となく淋しい所であつた。かゝる時二人の姉君でもゐたらばとしみく思えた、「さらば日田の盆地よ永く吾友の墓を守つてくれ」と之が私が日田に對する最後の言葉であつた。

上佛教に一大鐵錘を下して女——然も最も卑しめられてゐた——は明らかに救濟されると云ふ事實を勅傳等で明記してゐるのを見て本當に嬉しく思ふ。勿論之れは貴族佛教を民衆佛教にした聖法然に於て初

めて出来ることであらう、聖法然は女子を同一水平線に引き上げてくれた、女性から云へば大恩人であるはずである。それを女の人々は忘れてゐるし、それを女の人々に教へることを私等は忘れすぎて居る。

昨今では女子教育は進んで來てる、女子の人格向上に注意しかけてる、政治上に於ても女子に選舉權を與へると云ひ、識者間では女子も男子と同一のレベルに立つてもいいと云ふてる時であるのに、まだ一部分では女子未だ男子に及ばずと云ふてる。女子教育は普及され、人格は或る点まで認めてる今日、なほ女子を奴隸視し、甚だしきに至つては品物あつかひにしてゐるのに、七百年前すでに聖法然は宗教上に於ては男女同權を叫んで居る。それが大人格者たる——聖日蓮に比すれば寧ろ強さの少いと思はれる——聖法然の言なりと思ふ時、眞理に向つて説かれる力の如何に偉大であるかを驚嘆する、之は聖法然のみでなく、少くも信仰を体顯してる人の言葉なり行爲にはいつも頭が下がる。我々は宗教學に依つて築き上げられたのみで、宗教に付いての知識のみを持ち、信仰に對する体顯を持つて居ない今の僧侶に學ぶ必要はない。若しそうした人に依つて學ぶと何等活動力のないものを握らされて仕舞ふから注意すべきである。

淨土宗は信仰的に進むよりも學究的に進んで來た。明

治になつてから一層その氣分にみなぎつて居る。そうした究理の超過に陥らうとする宗門の徒を、再び宗教の秘義に温めたのは聖弁榮であつた。靜慮の生活に於て、生命の深き體驗が彼れに依つて現はれて來かけた。すると現代人の多くは別時を病的視する、然しそれがなかつたら、何うして佛教が純な相の幾分を支へたであらう。靜かに念佛する彼等の生活がいつも人類の魂を守つてくれた。然しそれが何うやら有産家化し、貴族化しかけてるのではあるまいか。別時は寺院を出で、各人の家に來なければならぬ。否別時は各人の胸に行はれ、各人の行爲の上に、各人の仕事の上に現はれて來なければならぬ。

宗教は人生の運動である、だから之れが活動については社會のすべての理解と努力とを要する、僧侶は宗派的根生を超越せんとするところにこそ宗教家としての風格がなくてはならない。無意味に余他を拒絶し、若しくは無理解な批評によつて自己の優越を自ら舉示せんとするは苦々しいことである。彼等にとつては人生よりも宗教が重大である。宗教よりも教派若しくは宗派が大切である。而も宗派の充實はその内面的徹底によるのではなくて、その外部的打算や、統計的數字によらんとする。更らに苦々しいのは、僧侶や牧師たちが自己の名利に使

驅せられて、宗教を利用するところに存在するのではなにかと思ふ。切角聖法然が捨てられた女人を救濟し、聖辨榮が純信仰道に立ち歸り、それを基本として人生の大道に戦へと教示した念佛を捨てさせることになりはせないだらうか。

「法城を護る人々」の著者は云ふた「先づ祖師に還つて祖師を超越せよ、還るとは祖師の眞精神に直參する意味である、超越とは祖師の舊套を脱するの意である、故に還れとは七百年前の祖師にかへれとの謂ではない、かへつて祖師を今日の吾等が胸に甦へらせよ」と、私は此の

汽車の旅 (昭和四年三月 九州行)

神谷善之進

○東海道線にて

今日は晴れ國府津近くの右左

まぎごしに見る梅のよきかな

野を迎へ山を迎へつ梅かほる

のさけき春の汽車の旅かな

人生のたび路もいと面白や

その日その日の事を迎へて

雲晴れて神の日ぐらし思ふては

言葉に共鳴する。一ヶ所に固定し安住するのではなく、舊いものを破り、破つたものを破りつゝ精進する時、念佛と生活と、信仰と生活とは合一点に進む機を生む。人間の發見と、その體驗を外にしては眞實の念佛はない。だから日常生活の上に宗教的生命の燃焼してるものこそ生きた宗教である。傳統と多數の信者を擁するところが念佛を強めるものではない。

念佛を唱へてる人がすべて、天國に入るわけではなく、佛の意志を成し遂ぐる者が天國に入るのである。

神さながらの神秘を思ふ

そびる立つ不二の姿の見えざるは

迷ふ霞みのへだつればこそ

何ごともそれぞれ好みあるなれば

押賣するはせんのなきこと

○午后三時(濱松通過)

大井川たゞ一しゆんに打ち越しぬ

他力たのみし今日の我が身は

三河路に入りてますます空くもり
雨もやうとは成り行きにけり

○午后四時古郷に近くなりぬ
昔小供の頃登りし山を見て

まごころしに三角の峰見ゆるなり
むかし登りし本宮の山

○安城驛にて
亡き父と共に夜煙火見に行きし

森や社を思ひて過ぎぬ
病むとても病めば病むにて御慈悲をば

よろこびしのお法の友ごち
神も無く佛もなしといふ人は

見えず知らねばさは思うなれ
明月も雲にをらはれ見えざれば

有るとも知らで無しと思ひつ
それぞれに心に垣をめぐらして

をのづとせまく世を渡るなり
親切の言葉もなをく受け入れて

心いためて行きし人思ふ
○暗黒の景色思ふて

見えぬとも聞えざれども無といふ
淺き思ひのをろかさ思ふ

やみの夜に轟々然と走るなり

わき目もふらず只道のうへ
御佛に捧げまつりて南無阿彌陀

法の道をば進みこそせむ
○九州に入りて

話には聞けき寫眞は見たれども
今や来て見る是が本もの

我が國の女關口や下の關
船の出入も繁くこそある

鎮西とおとぎ話に聞しかぎ
一夜明くれば身はこゝにあり

昔なれば三十日余りの道中も
汽車の他力で二十四時間

大宰府や水城の趾の話をば
聞きつゝ見つゝ時も忘れて

○歸りの汽車中にて
いつ見てもけ高きすがた不二の山

こゝろよきかなけふのながめは
さすがにも春の景色や静かなり

をぼろにかすむ海山のさま
桃畑梨のはたけも見ゆるなり

みどり艶よき麥のまにまに

吾朋便り

○赤坂榮子様より

大變暖かく氣持よい氣候となりました
暫らく御無沙汰致しましたが先生には
相變らず御丈夫にて御勉強の事と存じま
す。私方にては一同無事で居りますから
御安心下さい。

先日は先生には焼津へお出で下さいま
したとの由ほんとうに皆様御嬉だった事
と存じます。

○大坪文治様より

先達は御留守中に參上拜眉を得ず残念
に存じました。お嬢様には御病氣にて御
入院でした由昨今の御容体はいかゞです
か御見舞申上げます。扱て私先月二十五
六日歸省の筈でしたが、やむない事情が
起りまして延期する事となりました。國
の方でも大分待つた由大方の皆々様にも
申辭ない事をいたしました。何卒悪から
ずお赦下さい。少し暇にもなりましたら
お邪魔さして戴きます。先は不取敢意
を得ます。

○土屋親道

○愈々春も盛りとなりました。皆様御變
りもありませんか。御安康のほどを祈つ
てゐます。私の方でも永らく御心配をか
けました美智子も丈夫になり、此の四月
からは學校にも行くやうになりました。
乍他事御安神のほどを願います。その他
は皆無事、良子も幼稚園に行き、光道も
漸く歩き廻るやうになりました。慈光の
中に安心して、勉強が出来るのを喜んで
居ります。

○先月の中頃、親の法事で九州へ歸りま
した。九州の道友も一二訪れましたが、
十年ぶりの集りでした。やつぱり昔々一
つも變らない友の喜びほど嬉しいものは
ありませんでした。

○歸りには神戸、尼ヶ崎、大阪、名古屋
焼津へ立寄りしました。又下車の都合と時
間の都合もよかつたので静岡、清水、沼
津にもよりました。僅に二三時間、若く
は一二時にも足らぬ訪問でしたが、それ
でも限らない喜びでした。その他の所へ
も寄りたいのですが失禮しました。ご
うぞ御許しを願ひます。

○行基寺の三昧會も愈々近づきました。
全力を以てやりたいと思つてゐます。

○序では恐れ入りますが、去る二月に唐
澤の阿彌陀寺上人が御選化の由教報で知
りました。永年、道友先輩として御世話
になつて居りましたが、残念なことに
存じます。一寸右皆様へお知らせ申す
○之から暫くは氣候もよく、働くにも遊
ぶにも最もよい時であります。よく働き
よく遊ぶと云ふ西洋の謔もありませんが私
共も大いに働き大に遊んで此の春を過ぎ
ませう。私も幸いに無事ながら一層馬力
をかけて勉強したいと存じます。幸に御
安神下さい。

○眞生の發刊が遅れてすみません。今月
號も先月末からかゝりつめてありますの
に、今にして暫く原稿が出来上つた次第
決してなまけた結果ではないのですから
御許し下さい。少しでも本當のものを努
力してかくも遅くなるのです。

○四へんも五へんも筆まつて、書き直し
書き直したのも可なりが多いのです。
どうぞそのつゞりて御讀下さい。

行基寺別時三味會案内

時 所

四月十六日午前五時開白
同二十二日午後九時閉會
岐阜縣海津郡城山村 行基寺
(養老電鐵錦美濃山崎驛下車約十五丁)
導師 土屋 觀道 師
久方振りにしつとりと修養したいと思ひます。前日までに御
登山下さい。

行 基 寺

誌代拂込御芳名

- 壹圓 岐阜本覺院様、愛知加藤教明様
三重石川一男様、大阪旭徹様、岐阜山
村ちづ様、浦賀石塚様、伊藤いく様、
長安寺様、岐阜林重太郎様、尾關栗洞
様、舟木政太郎様、小澤やす様、河瀬
音吉様、伊藤孫左衛門様、新井様、松
浦重三様、西村作十郎様、浦賀小川廣
雄様、竹内倉吉様、渡邊眞戒様、堺市
山上萬壽様、大阪月江寺様、
- 貳圓 京城金丸會一様、福山市吉川聖
善様、岐阜藤橋重道様、浦賀黒岡仁太
郎様、神奈川相馬千里様、岐阜片桐照
子橋
- 參圓 岐阜行基寺様 ○五圓 沼津辻
義様 ○貳拾圓 焼津光心寺内眞生會
焼津支部扱 ○拾圓 東京都築七太郎
様 ○壹圓 柏崎大橋スイ様、近藤松
榮様、猪浦博次様、飛田姫子様、小熊
彌一様、廣川浩三郎様、高野政五郎
様、渡邊三十郎様、黒丸友治様 ○貳
圓 會田証様、後藤甚次郎様 ○五圓
岡村常一様 ○五拾圓 原吉郎様
- 貳圓 福山市吉川聖善様、大阪中川孝
子様、上諏訪山田たけ様 ○壹圓 成
岩町青柳智月様 ○五圓 名古屋近藤
正様 ○五圓 大阪橋本政一様寄贈

11850

價定誌本	
一部	金 十 錢 郵税共
半年	金 六 十 錢 全
一ヶ年	金 一 圓 全

註文の注意
 講讀希望者は代金を添へて御申込下さい。
 誌代は總て前金御拂込の事
 送金は振替によるのが便利
 です

昭和四年四月十九日印刷納本
 昭和四年四月廿二日發 行
 東京市芝區芝公園十四號地九番
 編輯兼 發行所 土屋 觀道
 名古屋市西區隅田町二一番地
 印刷人 百々治之助
 電話西(5)二九三番
 名古屋市中區鍋屋町二丁目
 印刷所 龜山田活版印刷所
 電話東(4)三六五・三六六
 東京市芝區芝公園十四號地九番
 發行所 眞生社
 振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日) 昭和四年四月十九日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第八卷 第四號
 (第三種郵便物認可) 昭和四年四月廿二日發 行